市民による
諫早干拓「時のアセス」

2001年4月

企画・編集

諫早干潟緊急救済東京事務所

諫早干潟緊急救済本部

WWFジャパン

市民による諫早干拓「時のアセス」

目　次

は じ め に ……2
●花輪　伸一（WWFジャパン）

〈1. 序論〉「時のアセス」―農水省版と市民版 ……4
●陣内　隆之（諫早干潟緊急救済東京事務所）

〈2. 営農〉営農計画の諸問題……9
●青木　智弘（農政ジャーナリスト／雑誌「暮しの手帖」編集部）
●助言：碇山　洋（金沢大学経済学部助教授）

〈3. 防災〉防災計画とその虚実 ……18
●片寄　俊秀（関西学院大学総合政策学部教授）

〈4. 環境〉諫早湾干拓アセスの破綻と有明海異変 ……30
●東　　幹夫（長崎大学教育学部教授）

〈補論〉諫早湾潮止め後の調整池および
湾口周辺海域における底生動物生息状況の変化 ……34
●東　　幹夫（長崎大学教育学部教授）

〈5. 財政〉費用対効果評価 ……41
●宮入　興一（愛知大学経済学部教授）

〈補論〉今後の建設工事の問題点 ……63
●高田　直俊（大阪市立大学工学部土木工学科教授）

〈6. 総括〉市民版再評価結果 ……65
●羽生　洋三（諫早干潟緊急救済東京事務所）

■参考資料

〈緊急インタビュー〉漁民／農民／市民の声 ……72
〈緊急特集1〉データは語る……漁業被害と諫干の関係……81
〈緊急特集2〉「水門の開け方」についての二つの提案 ……82
国営土地改良事業等再評価実施要領 ……84
「国営土地改良事業等再評価実施要領」見直しについての要望 ……84
（2000年11月29日　諫早干潟緊急救済東京事務所）
「国営土地改良事業等再評価実施要領」見直しについての回答 ……85
（2000年12月27日　農林水産省構造改善局）
国営諫早湾干拓事業に関する質問主意書（2000年5月26日　参議院議員・中村敦夫）……85
国営諫早湾干拓事業に関する答弁書（2000年8月8日　内閣総理大臣・森　喜朗）……86
川辺川国営かんがい排水事業の再評価概要（平成10年度）……95

●表紙写真：森永幸子

はじめに

『市民による諫早干拓「時のアセス」』は、諫早湾および有明海の現状を深く憂い、官僚の独走による大規模公共事業の進め方と国政のあり方を批判し、真の意味での公共性を求める市民、研究者が協力し、議論を重ねてまとめたものである。各レポートの著者およびその協力者たちは、諫早湾干拓事業の当初から、あるいは1997年4月の潮受堤防閉め切り後から、諫早湾干拓問題に深くかかわりを持ち、何度も現地に足を運び、資料を収集し、事業見直しを訴えるシンポジウム等を開催し、行政への要請もしばしば行ってきた。

この報告書の直接の目的は、2001年に事業者である農水省の「国営土地改良事業等再評価実施要領」によって行われる諫早湾干拓事業の再評価に対抗して市民版時のアセスを実施し、農水省版時のアセスに前もって批判を加えることにある。私たちは、この批判によって、農水省版時のアセスが、特に、再評価にかかわる専門家の第三者委員会が、事業継続を前提とした形式的なものではなく、現実の社会情勢、環境問題を直視し、事業見直しという合理的な判断を行うことを強く期待している。これは、農水省版時のアセスが、その制度自体の持つあいまいさ、すなわち、再評価の内容が限定的であり、昨今の諫早湾・有明海の環境汚染や漁業被害、農業を取り巻く厳しい社会経済状況と干拓地農業の問題点、干拓事業へのこじつけではなくして本来行われるべき防災対策には言及されないなど、多くの不備を抱えていることへの批判でもある。さらには、情報公開と市民参加が保証されていないため、再評価の客観性について疑問があることへの抗議の意味も含まれている。

本報告書の第1章では、諫早湾干拓事業の概要、農水省版時のアセスの概略とその問題点、市民が求める時のアセスについて述べ、第2章では、干拓営農構想について分析し、構想の背景、作物の過大な反収見積もり、販売経路と作付型の問題、入植者の費用負担、農業用水の問題を指摘した。第3章では、防災問題を取り上げ、「防災干拓」の欺瞞、虚偽宣伝を追及し、低平地浸水災害の原因と本来の対策、高潮対策について述べ、干拓事業費改訂のからくりを指摘した。第4章では、環境問題を取り上げ、潮止め後の赤潮増加、潮流変化、底生生物や魚介類の激減、ノリ不振などをとりあげ、水域環境変化の原因と問題点について分析した。また、アセスメントとモニタリングの不備についても批判した。第5章では、干拓事業の財政問題について、独自に費用対効果を分析し、公共性の検証、便益と損失の比較などを行い、農水省による評価のからくりと問題点を明らかにして批判を加えている。第6章では、前章までの議論を受けて事業目的を検証し、着工後の社会経済状況の変化、費用対効果の問題などについてまとめを行い、事業の中止を結論づけている。さらに、その後の諫早干潟と有明海の再生についても触れている。

以上の分析は、市民と研究者が主体的に行ったものであり、まさに「市民版時のアセス」

である。これは「民」の立場をつらぬいており、その目指すところは「公（おおやけ）」である。一方、農水省版時のアセスは、前述のとおり「官による官のためのアセス」であり、公の理念を欠いている。民が官に欠落しているところの公を指摘し、批判し、反省を求めざるを得ないところに、この国の現実がある。

しかし、逆に言えば、ようやく市民がみずから科学的な知識と方法論、知恵を身につけ、真に公共のための施策を求めることができるようになってきたのである。もちろん、市民には漁民、農民も含まれる。諫早湾干拓、そして長良川河口堰、吉野川可動堰、川辺川ダム等、多くの無駄な公共事業に対する市民の怒りと反対運動は、着実に、行政の、政治の、世の中の流れを変えようとしている。

2000年7月、諫早湾干拓事業に反対の立場をつらぬき、環境保全運動の思想的、行動的リーダーであった山下弘文氏が急逝した。氏を失ったことは、運動にとって大きな痛手であった。しかし、ゴールドマン環境賞を受賞した山下氏の残した業績と影響はきわめて大きく、彼にかわって多くの小さな山下弘文たちが誕生しつつある。諫早干潟緊急救済東京事務所のボランティアたちの、この半年の急成長は著しい。目的意識を持ち自腹を切って運動を続けることの意味が、ここにある。彼らの熱意と行動力によって、この『市民による諫早干拓「時のアセス」』が完成した。

この報告書が、国営諫早湾干拓事業の見直し・中止につながり、諫早干潟と有明海の再生に寄与し、隣接する八代海、球磨川・川辺川の環境悪化の予防に役立つとともに、他の無駄な大規模公共事業の見直しにも良い影響をおよぼすことを期待している。

2001年3月

花輪　伸一（WWFジャパン）